

自分のからだをもって

神の栄光を現しなさい

(1コリント6・20)

一、代価を払って買い取られた

聖句を見てまいります。《あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。》とあります。このことばを聞いたコリントの教会の人たちは、とても良く理解できました。と言いますのは、当時イスラエル以外では奴隷の身分の人たちが、自由人、すなわち奴隷でない人たちよりも多かったからです。そういう地域でしたから、教会員たちは、《あなたがたは、代価を払って買い取られたのです》を聞いて、はつきり分かりました。主イエス・キリストを信じる者は、罪から救われて、神の領域に属する者となりました。キリストのいのちという代価が、律法の要求に対して支払われたからです。こうして、キリストを信じる者は、神が所有する者として、世から取り分けられました。

二、神の栄光を現しなさい

神の御意思は、すなわち父・子・聖霊として御自身を現しておられる神の御意思は、神の栄光を現すことです。神が栄光を現されると、そこには秩序があり、あらゆる善いものが現れます。神は、

主イエス・キリストを信じる一人ひとりの内に、御霊によって住まわれています。こうして、《自分のからだをもって神の栄光を現しなさい》は、だれかから言われて、いやいやながら、強いられるのではなく、心で決めたとおりに行うこととなります。『どうしたらこの身をもって神の栄光を現すことができるか。』これが、主イエス・キリストを信じた者が、すなわち罪から救われた者が、願っていることです。

三、主日を聖別する

きょうの礼拝は聖別がテーマなので、御霊が促される二つのことを確認したいと思えます。一つは、主日を聖別することです。主日は聖日とも言いますが、元は安息日の教えから来たものです。《安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。》(出エ20・8)がそうです。「聖なるものとせよ」とは、「聖別しなさい」の意味です。この日は、仕事を休みなさい。神が六日間世界を造り、七日目に休んだからである、という教えです。神は安息日を、神を思い起こす日、神を礼拝する日として、聖別された民イスラエルに語られました。こうして主イエスも弟子たちも安息日を守っていました。その後、異邦人社会にキリストの福音が広がって行きますと、信じた者たちは、キリストが復活した「週の初めの日」に集まって「パン裂き」を行

い、礼拝を献げていたようです。紀元一世紀の終わりになりますと、「週の初めの日」を指して「主の日」と呼んでいる記述が現れます(黙1・10)。

四、収入を聖別する

御霊が促されるもう一つのことばは、収入を聖別することです。すなわち、献げものです。私は、献げものを二つの種類に分けて考えたらよろしいかと思っています。一つは「十一献金」です。人によっては「月定献金」「月約献金」であります。もう一つは「感謝献金」、あるいは「このことのために」として献げる「指定献金」です。十一献金、すなわち十分の一献金という名称は、非常にはつきりしていることばです。収入の十分の一を献げるといふ名称の献金だからです。教会によっては、「十一」ということばを使わないところもあります。たしかに、私たちにとって献げものの基本は、《一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。》(1コリ9・7)です。ですが、もし十一、すなわち十分の一ということばがなくなってしまうたら、どうやって献金額を決めるのでしょうか。他の教会員に「私は新参者なのですが、献金はどのくらい献げたらよいのでしょうか」と聞くことになるのでありましようか。ですが、十一ということばがあるので、たといそれ

に到達できなくても、考える基本になります。それに、十分の一ということばは、旧約聖書の中にもたくさん出てまいります。聖書の舞台となった地域では、十分の一は「私はあなたのしもべです」という意味合いがあったようです。アブラハムは、いと高き神の祭司メルキゼデクから祝福を受け、すべての物の十分の一を差し出しました。またヤコブは、アブラハムの神、イサクの神は私の神でもあるのだと知り、「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます」(創28・22)と語っています。私が人に勧めるときは、「一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい」が、聖書が教えることです。十分の一を目標とされたら良いです。そのように言う私は、十分の一を献げています」とお語りしています。

もう一つの、感謝献金、あるいは指定献金ですが、こちらは自由献金です。例えば教会として、建物を維持して行くために、また将来の建て替えを見据えて会堂献金が必要です。教会としては、必要を訴えて行くことが大切ですが、神さまは一人ひとりに思いを起してください。ですから皆さま、主にあって、自分がやりたいと願うことをなさってください。その姿こそは、聖別された人の姿です。本人も周囲も祝福されます。